



Title	末吉家訪問
Author(s)	岡田, 玄碩
Citation	懐徳. 1924, 1, p. 35-36
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88691
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

三先生の墳墓を禮拜し午後六時嵐山停車場發電車にて

一行皆な歸途に就きたり。

末吉家訪問

岡田 玄 碩

東成郡平野郷の地は府下に於いて最も古い歴史を持って居る地であつて、阪上田村麿の子孫と稱する七苗家のある者は今も尙歴として此地に住んで居る。昨年訪問して含翠堂並に懷徳堂關係の文書を拜見した土橋家も其一であつたが、此處に記す末吉家も亦七苗の一である。

四月二十七日、豫て井上正美君より依頼して同家の快諾を得てあつたので正午南海の恵比須停留所に集合松山、稻束兩先生、井上、野口、平野の三君に私と一行六名は末吉家を訪れた。この日井上氏の令兄森田博三氏及び三田猪太郎氏、山川七左衛門氏なども來て居られたが、午後三時過末吉家の親戚總代たる柏原仁兵衛氏が見わたので末吉一郎氏と相談せられ始めて同家の文書並に書畫器物を拜見する事が出來た。

末吉家の事は既に川島氏の「徳川初期の海外貿易家」

其他に於いて發表されて居るから、今更繰り返す必要もない様であるが、當日拜見した文書も重に末吉家に關係あるものであつた。

末吉氏は其祖勘兵衛利方に至り信長、秀吉の恩顧を蒙つたが、天正十四年八月十七日には秀吉は勘兵衛を援擢して河内丹比郡西忍村の代官とし天正十六年九月には更に諸公事を免除するといふ様な文書がある。これより前に、勘兵衛は諸國廻船の業を營み、浪華より東海諸國に至つたから、天正十六年八月には當時三河岡崎の城主であつた徳川家康は之に朱印を授けて港灣出入の諸役を免じた。豊臣氏が亡んで徳川氏の世になつて、勘兵衛の子、孫左衛門吉康は遂に海外貿易に従事する様になり、慶長十三年七月二十五日には暹羅國へ渡航の計可を得て居る。孫左衛門は暹羅を始め、呂宋へ渡航したことも前後七回に及んだが、當時使用し

た東亞航海圖は故原文學博士、伊勢の角尾七郎次郎氏所藏の圖と共に我國に三葉しかない珍品であつて圖は羊皮の上に胡粉を塗り其上に描かれたものである。

其他末吉家か秀吉より贈與されし金色燦爛、目を奪ふ計りの膳椀、費晴湖十二幅對、それを包んで歸りし更紗、洋紙に書かれし蘭語の單語など思へば何れも海外貿易當時の末吉家を偲ばしむるものばかりであつた

詩仙堂に遊ぶ

大正十三年五月廿五日（日曜日）堂友井上正美、岡田玄碩、野口幸雄、小沼量平、平野得三、の五名京都府愛宕郡修學院村に石川丈山先生隱棲の舊廬を訪ふ堂主喜んで一行を迎へ先づ客廳に請じ茶菓を饗じ欸待頗る力む次で各室及び室内に陳列せられたる先生の遺墨其他の寶物を觀る廬は詩仙堂を中心として至樂巢、嘯月樓、其他數室を總稱して凹凸窠と云ふ詩仙堂は中央の一小室にして本朝三十六歌仙に擬し漢晉唐宋の詩仙三十六人を選び狩野探幽に囑して各其像を方版に圖し各

薄暮末吉家を辭して平野の舊蹟を此所彼所案内されて大阪に歸つたのは午後九時であつた。

秘藏の珍什を惜氣もなく拜見を許され、加へて厚遇を賜はりし末吉家の好意に對しては私等の感謝して措かざる所である。尙柏原氏、末吉一郎氏に對しても厚く御禮を申して置きたい。

小沼量平

家の警絶を其上に題し四壁に排列して詩仙堂の扁額を掲ぐ故に此の名ありと云ふ今其詩仙と題詩とを擧ぐれば

別昆弟

蘇武（左方第一）

骨肉縁枝葉、結交亦相因、四海皆兄弟、誰爲行路人、況我運枝樹、與子同一身、昔爲鴛與鴛、今爲參與辰、

雜詩

陶潛（右方第一）

結廬在人境、而無車馬喧、問君何能爾、心遠地自偏、采菊東籬下、悠然見南山、山氣日夕佳、飛鳥相與還、